

ピアホームだより

2018. 10.10

統合失調症の自我発達を学ぶ

統合失調症は、知覚・思考・感情・意欲など多くの精神機能領域の障害として現れ、幻覚、妄想などの陽性症状と感情鈍麻、自発性減退、社会的引きこもりなどの陰性症状、記憶、注意、実行機能などの認知機能障害などからなる党友の症候群からなる。

症状の重い方は、社会的な適応に困難を伴うことから、(運が良ければ?)様々な支援をされることになる。また、逆に、なす術もなく放置され、無為に引きこもり生活を余儀なくされている方も多くと水査察される。

しかし、極度に意欲が減退していたり、認知機能の障害が重いと日常生活における様々な行動を起こすことが出来ず、つい周りに依存してしまう構造が生じてしまうように思われる。

幻覚や妄想が起こる大きな要素に不安があるが、認知機能の障害で周囲の的確な把握が出来ないと、行動ひとつ起こすにも不安が付きま

とい、それが幻聴となって行動を止めてしまう場面があるように見受けられる。

これらの症状は絡み合って当事者の存在を更に依存的なものにし、本人の意思(自我)とがどこにあるのかと云う疑問が生じてしまいます。

このサイクルから脱し、自立した日常生活を送るために、どうしたらよいのか?あるいは、どの程度まで回復は可能なのか?そのような目標自体が無理で、本人に過剰な負担を強いるだけなのか?

そんな疑問を持ち、ネットから、2つの興味ある文献を探り得たので、それを紹介しながら、このようなケースの関わり方を探って行きたい。

<あいまいさと統合失調症>—文献1

1 認知障害とあいまいさ

注意機能やフィルター機能の障害があると考える説がある。情報入力から行動の出力の一連の過程で一言語性記憶→注意機能→視覚・運動処理が障害がある。

2 社会的認知障害とあいまいさ

他人の考え、気持ち、場にふさわしい行動ができない。

3 自我境界のあいまいさ

と言ったものを持った存在であると捉えることが出来る。

<看護援助による慢性統合失調症の自我発達>—文献2

看護援助により、困難とされる慢性統合失調症の人にも自我発達がみられるとの報告である。その看護援助は、

目標1 他者との関わりにおいて脅かされず安心して良い関係を積み重ねることが出来るには
方法1 安心できる環境を提供し維持しつつ日常生活を援助する。

方法2 自己価値の回復を援助する。

目標2 自己の性質やあり方を理解し、自己を更に豊かにしながら、自己と折り合いをつつ満足して暮らすことが出来るには、

方法1 肯定的な意味を見出すことを支援する。

方法2 自己の望み願い、あり方を見出し、現実と折り合いをつけつつ、それに向かって行動できるよう援助する。

今月の予定

<10月21日>理事会

<10月22日>白石先生主催交流会